

内閣情報部三・二 情報第二號

重慶日本語放送（二月二十五日）

（東京都市逡信局聴取）

一、〇〇氏は〇〇〇席上で次の様に語りました。

今回の中日戦争に於て我々の欲する處は千二百年來武士階級に苛まれた日本の大衆に眞の自由を齎さんとすることである。日本の歴史を見るに武士階級と浪人は統治者となれば幾らでも悪いことが出来、國內に行詰れば國外に侵略の手を伸すを例としてゐる。蘆溝橋事件に端を發した現在の中日戦争も其の例であるが戦線に在る兵士の多くの間には厭戦の氣深刻化し、國內では徵兵を忌避する者多い實狀である。今日、日本は中國の滅亡を欲してゐるが中國は日本の滅亡を欲せぬ。

中國は日本に革命に依つて新日本の生れんことを欲し而して其の新日本と合作せんとするものである。

二、昨年十二月、日本の陸相板垣は航空兵團間に自己の勢力を伸さんとして腹心の部下を航空司令部其の他に入り込ませましたが此の爲に徳川中將との間に確執を生じ爾來徳川中將は悶々として樂まず先月三日、南京より廣東に赴く途中自殺を圖り航空司令部を大混亂に陥らせました。然し此の自殺は未遂に了り目下私に熱海で靜養中このことで其の後任は關東

軍少壯派の安藤三郎中將に決定しました。

三、中國人民外事協會の圓卓會議席上で郭沫若氏は次の様に述べました。即ち日本は最近の著しい豫算の増加の爲に近き將來に於て經濟的危機に逢着するであらう。三年來の日本の豫算を見るに一昨年は五十五億一千萬圓、昨年は八十二億六千萬圓、而し本年四月から來年三月末までの豫算は九十六億四千四百萬圓であるが之は何と莫大な支出であらうか。此の爲に日本の中産階級の購買力は著しく減少し、通貨は膨張を來してゐる云々。

又元横濱總領事邵氏は

日本の軍部と財界は最近又々衝突を來したが結局日本は其の莫大な軍事費支出に充てる爲に總動員法第十一條に基き凡ての軍需用品を收用するに至るであらう。

四、日本は國際間の中國援助が益々旺んになつて來ましたことに就て御話し申上げませう。

中國の第二期の抗戰既に始まり新しい年を迎へますと共に國際間に於ける中國援助の熱意を昂つて參りました。

其の主要なものを申し上げますと先づ世界反侵略大會の委員會が次の様な決議案を可決したところであります。

即ち其の決議案の内容は

(一) 各國とも日本向け軍需品の輸出を禁ずること

(二) 國際協定に依り日本品をボイコットすること

(三) 英、佛、蘇聯は一層結束して中國を援助し侵略國たる日本に對し金錢其他戰爭必需品を送らぬこと

と言ふのであります。次に全世界は懇つて中國に同情の念を寄せて居りますことと其の最も代表的なものは次の二つの手紙に依つて窺ひ知ることが出來ませう。

之等は深い人類愛と世界平和を愛する念に發したものであります。日本の皆さん良くお聽きになつて下さい。

其の手紙の一つは秋馬のアイダル社長から寄せられたものであります。其の内容は次の通りであります。

大中國の戦線に在る勇士諸君よ！貴方方は貴方方の崇高なる人道的精神と世界博愛の念を以て貴方方自身的一切を犠牲にし中國の主權の確立と領土の保全の爲に惨忍野蠻にして平和の大敵たる日本と戦つて居られるが世界は日本軍閥の一切の惨忍を亞弗利加土人の行動と同じに見て居るのであつて貴方方の勇敢さは賞讃に値ひし貴方方の世界平和に貢獻せんとする意圖は眞に同情に値ひします。私は貴方方と國を異にしますが私の血と肉は極東のものであります。貴方方の勇敢さに對し私は私の敬意を悉く貴方方に捧げる

と共に私の能ふ限りの援助を自由の戦線に捧げ度と思ひます貴方方は大中國に一新時代を生ましめる光榮を擔ふことが出来るのであります。

私は貴方方が最後の勝利を得られんことを祈りつつ欄筆します。

次は×××博士から寄せられたもので次の様な内容であります。

前線に在つて世界の敵日本と戦つてゐる新中國の兵士諸君、君等の武器は不足だが國土防衛の任務を負ふ諸君に君の同胞は永遠の感謝を捧げるであらう。此の手紙を送る私こそ之を受取る諸君とは人種を異にするが私は諸君の國家と諸君の同胞と思ひを同じうするものである。最後に私は諸君が諸君の鐵の意志と火の如き勇敢さを以て新しい萬里の長城を築かれんことを望む。

此の二つの手紙を聴かれた皆様んは異常な感動を受けられたことと思ひますが以上の如く現在世界各國には中國に對する同情と援助が深まりつつあり日本の同胞の中にも厭戰の氣分が既に芽ぐんで居り又中國の南・中・北に居る日本の兵隊は屢々反亂の叛戰を起してゐる有様であります。

私等は反侵略、反日本帝國主義に私等の最上の敬意を表するものであります。

日本内地に在る皆さん！前線の反戰兵隊に呼應し反侵略運動に参加して下さい。

### 内閣情報部三・二

#### 情報第三號

重慶（U・P）新聞電報放送（二月二十六日）

（朝鮮總督府遞信局聽取）

重慶は皮肉と嘲笑、非常な輕蔑を以て喜多の新和平案を迎へた、支那官吏特に日本問題の專門家達は南京に國民政府を再立する計畫を早速批判してゐるが彼等の論旨は次のものである。

(一)日本側が孫逸仙の三民主義を採用することは日本が精神的に支那に降服したことを意味する。平沼、板垣すらが帝國議會に於て三民主義問題を討論したことは日本側が慎重且つ熱心に三民主義の再吟味と利用を考へてゐることを示してゐるが、支那人は何人も日本がでつち上げんことを信じないであらう。

(二)喜多は北平特務機關の長として公然和平の筋書を計畫してゐる第一人者である、日本政府はずつと前から和平に贊成してをり、手始めに北平の傀儡政權をして和平提唱を爲さしめたが之は効果がなかつた。今や日本側自身が和平問題に「我慢し切れなくなつて」自ら和平を申込んでゐるのである。

(三)汪精衛は賢明で南京に計畫されてゐる政權が就中邪惡な傀儡政權であることを充分諒解してゐるから、國民黨員は彼に和平の傾向ありとはいへ南京に計畫されてゐる國民政府に参加することはあるまいと信じてゐる。